



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

**全日畜ワークショップ（千葉会場）
自然災害に強い畜産経営を目指して**

速報レポート

- ◎ 開催日 令和2年9月4日（金曜日）
- ◎ 時間 13:00（開会）から16:00（閉会）
- ◎ 会場 ホテル「ポートプラザちば」（2階「パール」）

令和2年10月

全 日 畜

（一般社団法人 全日本畜産経営者協会）

はじめに

私たち、畜種横断の畜産生産者の団体「全日畜」は、令和2年度の日本中央競馬会畜産振興事業として「自然災害に強い畜産経営の実現調査事業」を実施しております。

この事業は、近年多発している台風・豪雨、地震災害等が畜産経営に甚大な被害をもたらしていることを踏まえまして、この調査において、畜産経営者が参加するワークショップの開催や、アンケート調査の実施等を通して、災害時の対応を明確にし、自然災害に強い畜産経営の実現を図ることを目的としています。

本書は、令和2年9月4日（金）に実施した、全日畜ワークショップ（千葉会場）「自然災害に強い畜産経営を目指して」の概要を整理した「速報レポート」です。多くのみなさんにご覧いただき、喫緊の課題である、自然災害に強い畜産経営の実現の一助となれば幸いです。

令和2年10月

一般社団法人 全日本畜産経営者協会
(全日畜)

自然災害に強い畜産経営を目指して

- ◎ 開催日 令和2年9月4日（金曜日）
- ◎ 時間 13:00（開会）から16:00（閉会）
- ◎ 会場 ホテル「ポートプラザちば」（2階「パール」）
〒260-0026 千葉市中央区千葉港8-5
TEL 043-247-7211

- ◎ プログラム

第一部	13:00 ~ 14:25
------------	----------------------

昨年の台風15号（令和元年度房総半島台風）で大きな被害を被った畜産経営者等をゲストに招き、生産現場の実態等についてご報告をいただきます。

休憩	14:25 ~ 14:40
-----------	----------------------

第二部	14:40 ~ 16:00
------------	----------------------

会場にご参加された皆さんも一緒に、自然災害に対応した畜産経営の在り方を考え、安定した畜産経営の継続について意見交換を行います。

（ 全 日 畜 ）

一般社団法人 全日本畜産経営者協会

令和2年度「全日畜 ワークショップ」



「自然災害に強い畜産経営を目指して」

◎ ワークショップの進め方

- 1 ワークショップは全国3か所（3ブロック）で開催します。
- 2 テーマである「自然災害と畜産」に知見をお持ちの方にご参加いただきます。
- 3 参加された皆さんと「自然災害に強い畜産経営」について意見交換を行います。
- 4 ワークショップの成果は、中央で開催する「セミナー」でさらに深掘りします。
- 5 調査の成果は事業報告書等に取りまとめます。



◎ こんな「声」を聞きますか？

- 経験したことがない豪雨災害に見舞われ、畜舎が倒壊し大切な家畜がへい死した
- 大型地震が発生し、社会インフラがマヒし、数日間「ブラックアウト」を経験した
- 道路が全て寸断され、飼料の供給など、畜産生産資材の供給がストップした
- 大地震（津波も発生）で、飼料製造工場が被災し、飼料の製造が止まった
- 生産物の出荷先の工場が被災し、操業停止となり、やむなく生産物を破棄した
- 断水となり、家畜飲水、畜舎洗浄水、畜舎消毒などが不能となった
- 洪水で冠水し、草地等や調製飼料（乾草、サイレージ等）が被害を受けた 等々

全日畜が、地域で開催するこのワークショップは、全日畜が実施する令和2年度の日本中央競馬会 畜産振興事業「自然災害に強い畜産経営の実現調査事業」の一環として実施いたします。

（問合せ先） （一社）全日本畜産経営者協会（全日畜） TEL 03-3583-8034 （山田、陣野原）

1 全日畜ワークショップ「千葉会場」の概要紹介

◎ 開催日 令和2年9月4日（金曜日） 13:00 ～ 16:00

◎ 会場 ホテル「ポートプラザちば」 2F「パール」

2 昨年の「15号房総半島台風」等の教訓や「学習したこと」等を意見交換

	<p>千葉県の畜産経営者</p> <p>(有) 高秀牧場 代表取締役 高橋 憲二 様</p> <p>(酪農経営者からの報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・台風15号で、5日間の停電と水道の断水を経験 ・出荷先の機能不全で辛い生乳廃棄を経験 ・牛舎、堆肥舎、倉庫、屋根等も損壊 ・被災した施設等の復旧体験を報告します
	<p>千葉県の畜産経営者</p> <p>北見畜産(有) 代表取締役 北見 則弘 様</p> <p>(養豚経営者からの報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・台風15号で豚舎の屋根が飛び母豚35頭が死亡 ・2日間の停電と4日間の道路の遮断を経験 ・復旧作業が重労働で、自身も体調を崩した ・ライフライン確保の大切さをお話します
	<p>千葉県の畜産経営者</p> <p>(有) サンファーム 代表取締役 林 共和 様</p> <p>(養鶏経営者からの報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・台風15号で、3日間の停電を経験 ・発電機がオーバーヒートして鶏3万羽が熱死、ひよこ300羽が死亡、集卵は人海戦術で対応 ・電力確保の重要性についてお話します
	<p>千葉県全日畜 事務局長</p> <p>瓦井 哲夫 様</p> <p>(緊急アンケート調査の報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・千葉県に台風15号・19号・21号が襲来 ・搾乳牛、繁殖豚、採卵鶏の死など被害は甚大 ・各配合飼料会社は被災農場への支援を展開 ・被災直後のアンケート調査結果を報告します
	<p>配合飼料製造会社</p> <p>中部飼料(株) 鹿島工場 営業課長 竹中 一展 様</p> <p>(飼料メーカーからの報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・営業マンの支援について報告します ・事態は、家畜の斃死、畜舎の倒壊、停電、断水、搾乳不能、集乳不能、集卵不能等々 ・職員を派遣して支援は、被災状況確認、被害畜舎の処理、発電機の手配、斃死家畜回収等
	<p>東金酪農農業協同組合</p> <p>組合員 長嶋 透 様</p> <p>(出荷先等についての報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・甚大な被災の中からお話します ・生産された生産物が現場で廃棄される辛さ ・生産物が消費者まで届けられないもどかしさ ・流通・可能段階も含めたネットワークの大切さ
	<p>千葉県 畜産課</p> <p>生産振興班 班長 丸山 武則 様</p> <p>(県の行政機関からの報告)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・行政機関が把握した被害等を報告します ・収集したデータ等をご紹介します ・行政機関の支援のあり方 ・自然災害にどう対峙すべきか（私見ですが）

令和2年9月4日

全日畜「自然災害」ワークショップ（千葉会場）

日 時：令和2年9月4日 13:00～16:00

場 所：ホテルポートプラザちば

発表者：高橋憲二	有限会社高秀牧場 代表取締役
北見則弘	北見畜産有限会社 代表取締役
林 共和	有限会社サンファーム 代表取締役
瓦井哲夫	千葉県全日本畜産経営者協会 事務局長
竹中一展	中部飼料株式会社 鹿島工場 営業課長
長嶋 透	全日本畜産経営者協会理事（東金酪農農業協同組合組合員）
丸山武則	千葉県農林水産部畜産課生産 生産振興班 班長
推進委員会委員等	
岡田 望	公益社団法人 千葉県畜産協会専務理事（推進委員）
下山正大	有限会社下山農場 代表取締役（推進委員）
引地和明	一般社団法人 全日本配合飼料価格畜産安定基金 常務理事
司会・進行役	
内田賢一	全日畜専門員（調査員）
神谷康雄	全日畜専門員（調査員）
松原英治	全日畜専門員（調査員）

【 第一部 】

第一部では、昨年度（令和元年度）の台風15号及び19号等の豪雨・暴風被害で被災した畜産経営者及び当該被災に関わりのあった関係者等、7名から当時の状況等について情報提供をいただいた。個々の発表の概要は以下のとおり。

発表者：丸山武則 氏（千葉県の行政担当者から）

- ① 行政機関が把握した被害状況

- ・令和元年度は、9月8日～9日の房総半島台風（15号）、10月12日の東日本台風（19号）及び10月25日の大雨の影響で、畜舎等関連施設が損壊し、長期の停電により生乳生産や家畜の飼養に大きな被害があった。

（丸山氏提供の「千葉県における畜産関係の被害状況」は下表のとおり（会場配布資料から））

- ・令和元年度の房総半島台風（15号）の影響による農林水産業への被害について

被害の種類	頭数等	被害金額（千円）	主な市町村
採卵鶏・ブロイラー等	48万羽	512,875	市原市、袖ヶ浦市、君津市
その他家畜（乳用牛、豚など）	7,450頭	270,316	成田市、銚子市、八街市
畜産物（生乳、鶏卵など）	1,741 t	220,204	君津市、香取市、南房総市
合計		1,003,395	

- ・令和元年東日本台風(19号)の影響による農林水産業への被害について

被害の種類	頭数等	被害金額（千円）	主な市町村
畜産物（生乳）	14.6t	1,631	鴨川市、南房総市、館山市
家畜（豚）	4頭	245	旭市、富津市
合計		1,876	

- ・10月25日の大雨の影響による農林水産業への被害について

被害の種類	頭数等	被害金額（千円）	主な市町村
畜産物（ブロイラーなど）	3万羽	15,840	八街市、南房総市

- ・特に、15号台風では、採卵鶏・ブロイラー等48万羽、乳用牛・豚など7,450頭、畜産物（生乳、鶏卵など）1,741トン、被害総額10億円を記録した。長期停電の影響が大きかった。
- ・令和元年の災害情報は県のHPにも掲載し、令和元年9月9日からデータの更新を行っている。

② 県の対応状況

- ・県の対応では、県独自の対応として、台風15号による被災で死亡・廃用した乳牛・母豚・採卵鶏に代わる家畜の導入支援（被災畜産業緊急支援対策事業）を行い、また国の事業の活用支援により、畜舎修理のための資材供給や発電機の借り上げ等を推進した（畜産経営被災総合対策緊急支援事業）。

③ 行政機関の支援のあり方

- ・行政機関の支援のあり方として、気象災害に伴う停電や断水による生産活動への影響を最小限にするため、各経営体へ非常時用電源設備の導入を推進する。また、気象災害による施設の損壊及び家畜の死亡等の直接的な被害に備えるため、災害に強い畜舎の整備と家畜共済への加入を推進する。

- ・千葉県での気象災害の発生頻度は近年高まっていることから、畜産資源の被害を最小限に抑えるため災害時に対する備えについて関係機関との連携を図っていく。
- ・私見としては、生産者同士の連絡、市町村及び県の農業事務所、農協との連携が重要と考えている。

発表者：高橋憲二 氏 （被災を経験した酪農経営者から）

① 被災の状況等

- ・台風 15 号は、これまで経験したことのない強さと聞いたので、備えをしたつもりであった。9 月 9 日 01:30 頃から強風で家が揺れだし、倉庫の戸がガタガタ音をたてだした。02:30 に倉庫の様子を見ようとしたが、自分の身体が飛ばされそうであった。瓦が飛ばされ、車のフロントガラスが割れていた。倉庫まで 5m くらいなのに、たどりつけなかった。
- ・倉庫の瓦が飛んで、家の壁に 1m ほどの穴があいたときは家の倒壊を覚悟した。風が少しおさまった 05:00 に牛舎を見に行った。倉庫や堆肥舎の屋根が飛んでいた。
- ・停電となり、発電機を回した。発電機の出力は 150kVA あり、施設全体では 40kVA で足りるので、3 倍の能力があった。発電機は停電時に東電から切り替えができるように配電し、工サのミキサー用に毎日使い、非常時にも対応できるようにしていた。
- ・04:30 から搾乳作業に入るが、木が倒れて車で来るのは危険なので、牧場スタッフには 05:30 開始予定と呼びかけた。スタッフは牧場から車で 5 分くらいのところに住んでいるが、来るまでに 30 分以上かかった。しかし 05:30 には全員がそろい、発電機により通常どおり搾乳できた。
- ・水は 100m³ 必要だが、ポンプで揚水し、通常どおり確保できた。携帯電話、ラインがつながらなくなり、再度つながったのは 5 日後であった。
- ・2 日後に近隣の酪農家に発電機のないことが分かり、発電機を貸してあげた。牛は水を飲んでおらず、この農家はあきらめていた。発電機を持って行ったのは 20:00 頃だが、配線がつかないことが分かり、電気工事店に電話し、23:00 によろやく使えるようになり、2 日ぶりに搾乳できた。
- ・搾乳しても処理できないので、1 日分の生乳は捨てざるを得なかった。発電機はバークリーナなどにも交代で使用した。
- ・台風後、ものすごく暑くなり、耐えられずに死ぬ牛が出た。
- ・電気が非常に重要で、生乳 1 日分は自分の牧場で廃棄した。その後は集乳してもらったが、クーラーステーション（CS）に入れても冷えないので、たぶん千葉県内では廃棄されたと思う。このため県外へ出すこととし、4～5 日で出せるようになった。
- ・近場の処理工場では、2 週間停電したが、パイプラインにミルクが溜まっていたので、分解掃除するのに 1 週間かかった。その後、テスト洗浄したが菌が検出され、正常に動くようになるまで 1 カ月かかった。
- ・被害額は莫大だったが、積立基金により自分が廃棄したものは補償された。牧場の被害額は 2 億円

あり、補償により支払ってもらった。処理工場には何の補償もない。組合も1億円の売り上げがなくなり、1千万円の赤字を抱えた。災害時の売上補償の制度が必要と思う。

- ・ 大多喜町では木が倒れて集乳車が入らなかったため、自ら倒木処理を行っている最中に亡くなった酪農家もいた。その牧場は廃業となり、その後3～4日中に牛は近隣で預かることになった。
- ・ 発電機は必需品であり、購入またはリースで整備する必要がある。停電時に切り替えるための配電設備も準備すべき。CS用の発電機も重要である。
- ・ 酪農家同士で協力し合うことが重要で、非常時こそ、助け合う。非常時の備えと危機管理を充実すべきと思う。

発表者：北見則弘 氏 （被災を経験した養豚経営者から）

① 被災の状況等

- ・ 養豚をやっているが、運がよかったのか、今回の台風による被害はそれほどでもなかった。停電は2日目に解消した。発電機はポンプ揚水に使用した。養豚では水さえ取ればしのげる。
- ・ 私のいる畜産団地には6社が入っており、協力し合った。台風の日、水がきたのに母豚が死んだ、ストレスがたまっていたのが原因と思う。台風後猛暑になったが扇風機を回せなかった。死んだ母豚の片づけが大変だった。死んだ母豚は哺乳していた母豚で、子豚に母乳をとられ、水が足りなかったため8割ほど亡くなった。命を削って子豚を生かそうとした母豚はすごいと思った。
- ・ 古い豚舎の屋根が飛ばされたが、1つは使わなくてよいのでそのままとし、他は仮に直している。屋根の飛んだ堆肥舎は直した。スレート葺きの屋根は直しづらい。
- ・ 最初は倒木などで農場に入れず、到着するまで1.5時間かかった。従業員でルートをさがしたが、次の台風でまたやられた。豚舎は直せばよいが、家畜を確保するのは大変なので、災害時は家畜を優先する。
- ・ 農場に寝泊まりできれば、アクセスの問題はなくなる。と畜場が閉鎖されなかったため、被害は少なかった。非常時に備えることが重要である。
- ・ 災害に強い畜産とは、災害に備えることで、経営者の感覚が問われる。すべてに対応しようとせず、壊れても直せばよいという気構えで、最も重要なものを守るために対応すべきだろう。

発表者：林 共和 氏 （被災を経験した養鶏経営者から）

① 被災の状況等

- ・ 匝瑳市で採卵鶏を経営している。日記のように書き留め、撮影した写真で説明。台風15号に備え、9月8日には場内を点検・整理し、飛ばされそうな台車などは屋内に入れた。
- ・ 台風は9月9日05:00にピークとなった。リモートカメラで鶏舎を見ていた。05:30、まず育成農場から停電となり、発電機が始動し、その後順次、発電機が稼働はじめた。トタンが風で飛ばさ

れ突っ込んでくるなど、外には出るに出られなかった。

- ・ 06:00 に風雨が弱まったので6日齢のヒナの鶏舎にかけつけた。発電機の始動が失敗し、予備を頼み、再始動させた。自動的に扉が開き、しばらく風雨が吹き込み、ヒナがやられた。
- ・ 発電機で換気を行い、鶏舎内の温度が上がるのを待った。しかし温度が上がっても、細菌に感染し、死に始めた。300羽のヒナが死んだ。
- ・ 成鶏舎では発電機を回し続けるため、3時間に1度、給油した。サンファームでは最低限の換気だけ行った。
- ・ 九十九里ファームでは、新しいキュービクル式高圧受変電設備があったので、給餌、集卵にほとんど影響がなかった。発電機では給油が大変だった。
- ・ サンファームでは9月10日の朝には発電機が止まっていた。1時間経過後、外気を入れたが、夏の温度帯での鶏舎を初めて体感した。サウナと同じで、一瞬で汗びっしょりとなった。トリの呼吸からの湿気が充満し、息苦しくなった。開けられる扉は全て開け、予備の発電機で換気扇を回せたのは09:00で、3時間換気されなかったことになる。気温は34℃まで上がっていた。
- ・ トリの移動後、3週間たっており、36,000羽中、12,000羽のオヤドリが死んだ。鶏舎は3つあったので、全体で32,000羽が死んだ。死んだトリは早く出さないと、ほかのトリが死んでいくので、抜き出し、ダンプカーで9月11日から搬出した。大ヒナまで育て、卵を産みだしていたのに、死鳥を抜き出すときたまらない気持ちになった。これは経営者の責任と思う。備えが重要で、レンタルで借りようとしても借りられなかった。
- ・ 堆肥舎では屋根が飛んでいた。発電機があるなしで大きな差が出た。堆肥舎が使えなくなり、発酵せず腐敗する状態になったので、もとに戻すのに時間とお金がかかる。
- ・ 卵を産ませるにはエサをやらねばならず、糞が出るので、鶏糞処理ができなければ状況が悪化する。このため自分の手でエサの供給を止めた（トリを死なせた）経営者がいた。
- ・ 発電機が稼働するまで、集卵は手作業でおこなったが、量が多くて集めきれなかった。
- ・ 直売場は山の上にあるので、停電は2週間続いた。冷蔵していた商品はすべて廃棄した。
- ・ パッケージセンターには電気が来たので、製品を作った。サンファームでは産卵が低下し、6割はヒビ卵、破卵などで、4割しかとれなかった。注文にこたえられず、キューピーはB卵ですら受け取ってくれなかった。
- ・ 現在は、建物共済や支援を得て修繕が終わったが、電気関係は次々に壊れ、手動で動かすこともあった。塩害もあり、漏電に気を付けている。台風被害や経営の近況について説明し、支援を得るため、千葉県と農水省をお願いに行ったため、支援が具体的になった。
- ・ 3回の支援が行われ、我々は第2回の支援に申請した。おかげで5台の発電機が納品された。自動始動装置の接続工事はこれからだが、今年の台風シーズンは乗り越えられると思う。発電機があっても燃料の確保が難しい。去年も軽油の確保が難しく、ガソリンスタンドも停電で軽油を汲み上げられなかった。近所のスタンドが協力してくれ、ローリーで給油してくれたので助かった。
- ・ トリに入れ替えが進んだが、510日齢のトリが90%、卵を産んでくれている。これらのトリは、

鶏舎内の羽数が減って、快適に過ごしているのか、ツヤがよい。この災害により、トリの過ごす環境をよくする重要性が分かった。

(林氏提供の写真 (会場配布資料から))

(換気が止まって鶏舎内)



(死鶏の搬出状況)



発表者：瓦井哲夫 氏 (直後のアンケート調査結果から)

① 配合飼料メーカーによる支援活動実態調査

- ・ 県基金協会では、配合飼料メーカーが実施した支援活動について実態調査を行った。
- ・ 台風 15 号、19 号及び 21 号による集中豪雨での被災状況、及び、配合飼料会社 11 社が畜産農家に対して実施した支援内容。(調査結果の概要は下表のとおり (会場配布資料から))

被災状況の内容

区分	配合飼料会社	区分	配合飼料会社
1.家畜の斃死	10	7.搾乳不能	4
2.畜舎等の崩壊	8	8.集乳不能	4
3.停電	11	9.糞尿処理の停止	5
4.断水	10	10.生産物の出荷停止	5
5.飼料作物の被害	3	11.飼料の供給停止	1
6.道路の寸断	6	12.その他	1

支援の内容

区分	配合飼料会社
1.職員を派遣して被災状況を確認	11
2.飼料代金の延滞措置	2
3.資金の融通措置の支援	1
4.死亡家畜・家禽の処理支援	6
5.被害畜舎の処理支援	7
6.罹災証明書発行の手続き支援	1
7.その他	3

- ・配合飼料会社が行った支援のトップは停電対策で、次に斃死した家畜の処理、断水対策であった。災害当時、県、市町村から情報が入らず、心配であった。飼料会社は迅速に経営者とコンタクトし、現場にかけつけていた。営業活動の一環としても、動きは非常に早かった。
- ・会員 823 名のうち、589 名が被災し、うち酪農が 393 名で最大の被害者であった。養鶏ではすべて被災者となり、養豚では停電で被害が出ていた。
- ・飼料会社はすぐに対応し、肉体労働にもかかわった。13 社中協会 2 社は小規模なので除き、残り 11 社は 167 名ですぐに対応した。停電の継続、断水、畜舎崩壊などが続き、飼料会社で被災状況を確認してくれた。すぐに動いてくれたのは、頼もしい。
- ・基金協会では支援事業を行っており、斃死家畜の処理、発電機の供給、茂原・佐倉では水没した稲わらへの対応などがあり、飼料メーカーとともに尽力したい。

発表者：竹中一展 氏 （飼料メーカー営業マンの立場から）

① 営業マンによる被災状況の確認

- ・飼料会社としての災害への支援について、資料をもとに報告。台風 15 号は、最大瞬間風速 57.5m/s を記録し、千葉県を観測史上最大となった。このような中、静岡県、関東南部で 93 万戸が停電し、最大 30 日間続いた。
- ・倒木、電柱の転倒、アカデミアパークでは鉄塔が倒壊した。これにより、ウインドレス豚舎における窒息、熱死、レイヤーでの集卵ベルト、除糞ベルトの稼働停止、ウインドレス鶏舎の換気不足による窒息、熱死、鶏舎内の鶏卵滞留、GP センターの稼働停止などが発生した。
- ・固定電話・携帯電話の不通、道路遮断、燃料確保などの問題も発生したが、飼料の継続的供給は維持された。東日本震災では飼料を出せなかったが、今回はそのようなことはなかった。

② 中部飼料における対応

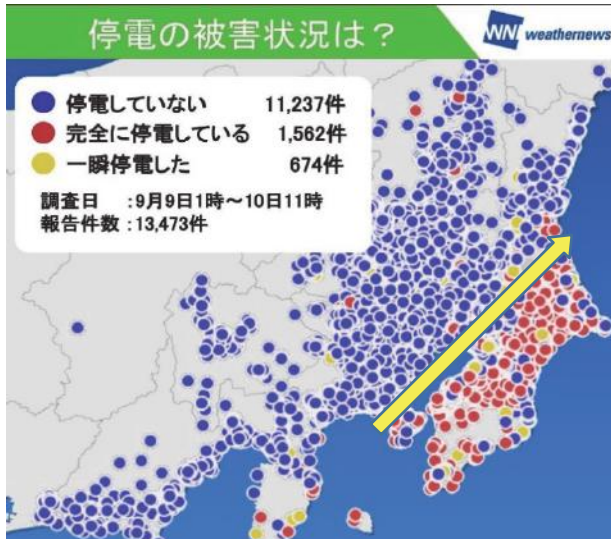
- ・中部飼料では、運送業者との情報共有で不通路を回避し、さらに経営体の要望に応じ人的応援を行った。これは延べ 7 日間、15 人で、斃死家畜の回収、生産物の回収、畜舎の修繕作業等を行った。

③ 今後における課題と対策

- ・現場で支障になったのは、発電機の確保ができない、運搬用ユニック車が確保しづらい、発電機の容量によってユニック車と別にクレーン車が必要、発電機の設置場所へ入れない、電気工士が確保しづらい、燃料の継続確保が難しい、などである。
- ・300kVA の発電機は 5t 弱あるが、ユニック車は 2.7t くらいなので、発電機を下せなかった。災害を想定した場合、発電機とトラックの確保、発電機の容量決定と運搬トラックの選定、発電機設置場所までのトラックの進入の確保、電気工士との事前協議・取り決め、燃料の確保と輸送方法、などを事前に調べて検討することが重要。
- ・災害発生時における、行動指針・役割分担をあらかじめ決めておき、従業員が万一の場合どう動けばよいか把握することが重要である。

(竹中氏提供の写真等 (会場配布資料から))

(停電エリアの分布)



(倒木で道路な不通に)



(送電線の鉄塔の倒壊)



発表者：長嶋 透 氏 (被災を経験した酪農経営者・東金酪農農業協同組合の立場から)

① 被災の状況

- ・現場にいた人でないと分からない話があった。大きな発電機はユニックでは下せないことはそのとおり。クーラーステーション用に400kVAの発電機を入れたが、ケーブルの太さは人間の腕くらいあり、結局使えなかった。電気工事士なしには設置できない。
- ・災害対策では、シミュレーションしていないと分からない。台風15号は、9月6日朝はまだ紀伊半島で、9月9日にはリース会社が発電機を持って来るだろうと思ったが、手遅れで、道路渋滞の

ため到着に 10 時間かかった。

- ・気温もあがり、牛はバテバテで、このとき落ちた乳量は戻らなかった。
- ・酪農協のことで、クーラーステーションが止まったのが想定外で、停電は 1 週間以上続き、東北電力の電源車によりようやく動くことができた。牛乳はエコフィード向けに処分した。
- ・発電機を持っている酪農家で十分に冷えたものは乳業工場へ送りました。ただし、乳業工場で検査して細菌数が多ければ返品、そういう条件だった。乳業メーカーは 24 時間の受入れ態勢をしいてくれて、牛乳は受けてくれました。しかし、牛乳の場合はどちらかというとエコフィードに回ってしまうんですが、エコフィードで処分した牛乳もかなりの量がありました。
- ・倒木により光ケーブルが断線して情報が収集できず、また、電柱が倒れたので立て直すのに時間がかかり、携帯電話が使えず、電波難民となった。
- ・日本農業法人協会として、江藤農林水産大臣に面会したが、大臣は被災地を見て回り終えていた。普段から災害対策をやるように言われた。一方、県、市町村は被害を把握できておらず、残念であった。
- ・県や市町村に頼りすぎると駄目である。東北電力には空いている電源車があったが、要請がなかったので出さなかったと言っていた。激甚災指定は、必要な数字が出ないと指定されず、自衛隊も要請がないと動けない。迅速に対応するためには、訓練が必要である。
- ・大規模経営であれば従業員は週休二日制で、たまたまリーダーが不在だと動かないので、誰でもできるようにしておく必要がある。
- ・400kVA の発電機を入れようとしたとき、千葉県にないので茨城県で探し当てた。普段から情報のネットワークを作っておかないと後々大変なことになると思った。
- ・搾乳した牛乳が発電機で冷えたバルククーラーにたまっていても、集乳車が来てくれないので、せっかく私共の牛乳を飲んでいただいている消費者に届けられず、供給責任を果たせないもどかしかさがあった。
- ・酪農協の乾牧草の倉庫が飛ばされまして、中にあった何コンテナ分の牧草を全部ぬらしてしまった。配合飼料はタンクに入っているからいいんですけども、牧草をすぐに手配しようと思っても、牧草はすぐには入手できない。その辺もいろいろ準備、備蓄というか、しておかないといけないうのかなというのを感じた。
- ・テレビ報道と現場は大違い。千葉県庁へ電話しても通じなかった。情報難民となった。
- ・東金酪農協が共同仕入れでスタンドを持っている。東日本震災でも活躍した。組合員に供給するという位置づけで、設置している。
- ・台風のと、飼料会社の営業マンが必要のなくなった発電機を貸してもらえないかと頼みに来たので、快く貸したところ、県内を 3 週間旅行して戻ってきた。おかげで、多くの方が助かったと思う。この飼料会社さんは素晴らしいと思った。

第一部の終わりに、推進委員会から参加されたお二人の委員から感想を述べていただきました。

下山正大 氏 （推進委員・被災を経験した養豚経営者から）

- ・旭市で養豚を経営。台風被害は軽くて済んだ。養豚を 36 年間行っているが、何回も台風にあい、近年はだんだんひどくなっている。今回は停電が長期化し、電気がないと経営はどうしようもないことを思い知らされた。
- ・台風 15 号では、発電機がないためたくさんの豚を死なせた経営者がいた。災害への備えとして、電気、保険を重視する。建築確認を取っていないと、建物への補償は出ない。
- ・火事を 2 回出して、1 回目は全焼で、建て替えの見積りを出したら高額となり、補償では足りないのので、見積もりをやり直した。3 年後の 2 回目の火災でも、見積もりすると高額となって、また足りなくなった。保険をかけるだけでなく、コストを見直し、掛け金を見直す必要がある。保険として、建物、家畜、被災後の再開までにかかる費用を補償する収入保険の 3 つをかけるとよい。
- ・発電機は、自動切り替えであれば壊れやすいので、前日に農場へ泊まり込んで、停電の時手動で切り替えたほうがよい。

岡田 望 氏 （推進委員から）

- ・台風 15 号の被害をまだ引きずっている人は多い。本日の参加者は比較的意識の高い方がそろっている。道路、水、電気などへの基本的な備えが必要で、ネットワークをつくるのが大切と思う。
- ・シミュレーションだけでなく、訓練を行わないと、役に立たない。しかし今のような災害では、あきらめざるを得ないこともありうる。
- ・県庁にいたとき、鳥インフルエンザのマニュアルをつくり、シミュレーションをやったが、全く動かなかった。想定外のことが必ず起こる。発電機を入れても燃料がないなど、想定外のことが起こることが災害なので、それに対応するには、その後どうするかという意識、被災後の再生を支援する投資を行ったほうがよいと思う。皆さんの話を聞いて感じた。

【補足及び意見交換： 第二部】

第二部では、第一部での事例報告等を踏まえて、さらに追加の説明及び会場の参加者との意見交換を行った。なお、調査員からは、追加説明の際に触れて欲しい点について説明があった。

発言者：全日畜専門員（調査員）

- ・千葉県丸山さんには、災害対応で行政機関に対して経営者等から要請があったこと、対応に苦労されたことがあれば紹介していただきたい。
- ・畜産経営者の皆さんには、保険や共済の重要性について、特に重点をおいて実施した防災対策について、対策が効果を発した事例などがあればご紹介していただきたい。
- ・基金協会の瓦井さんには、協会が動くにあたっての課題や問題点等があればご紹介していただきたい。
- ・飼料メーカーの竹中さんには、飼料備蓄体制の必要性について、特に内陸部向けの備蓄の必要性についてお願いします。

発言者：長嶋 透 氏（酪農経営者）

- ・千葉県では不通となった道路が多く、生産物・資材の搬出入が困難となった。餌が運び込めずに廃業まで至った人がいたと聞いている。
- ・備蓄した飼料にはカビが生えた。物流はタイトになっていると思うが、飼料供給について生産者も歩み寄るので、飼料メーカーさんにも考えてもらいお互い何ができるか考えてもらいたい。

発言者：竹中一展 氏（中部飼料株式会社）

- ・飼料の備蓄は難しい。長期間の保管では、品質が維持できない。東日本大震災のときは、成鶏用に1銘柄、豚用2銘柄、ブロイラー2銘柄から選んでもらった。通常は500くらいの銘柄があるが、フル稼働で生産するのは難しい。できるとすれば、緊急用の餌ということで、銘柄を絞って備蓄することになる。
- ・品質の維持がポイントとなるので、生産後1カ月で悪くなるので、品質の担保をどのようにするか、その仕組みを構築するのが最大のポイントとなる。
- ・国の助成支援があったとして、申請して実際にお金を受け取るまで時間がかかるので、心配になるという話をお客様から聞いている。

発言者：瓦井哲 夫（千葉県基金協会）

- ・基金協会では、メインの仕事として配合飼料の価格補てん事業、畜産振興事業、Alic事業の種豚導入事業などを行っている。職員は4名で、目いっぱい働いている。
- ・15号台風関係では、被災した養豚農家への豚の導入補助事業、発電機の借り上げ補助事業、肉牛農家への粗飼料確保緊急支援対策事業などを行っている。
- ・その他ASF、新型コロナの関係で学校給食用牛肉などの業務が入ってきて、4人では無理と思ったが、結局はできている。基金協会ではやれと言われれば、なんとかやっているといると思う。

発言者：林 共和 氏（養鶏経営者）

- ・自分で痛い思いをしないと分からないところがある。今回は発電機の重要性が身に染みた。電気が

あるのは当たり前とっていたので、鶏舎建設の時から用意して使っていた発電機は、停電になったとしても1日で復旧するという前提だった。当時は全く想定外で、ここまで大規模な災害になるとは思ってもいなかった。今考えると、当時、ものすごく小さな発電機を入れてしまったと思う。

- ・今回、発電機を3台入れ、動力、照明、事務所すべてバックアップすることにした。しかし機種を選定で、一齐に動かすと故障の原因になるし、インピーダンスの関係で、最初に電気を消費するし、連続運転ではオーバーヒートする。
- ・規格では25℃、湿度30%の条件で出力を出しており、外気温が5℃上がると内燃機関は熱ダレし、出力は11%下がる。夏の気温は34℃になるとして規格より10℃上がり、さらに出力が下がる。このようなとき、電気をフルに使い、モーターに負荷をかけると故障の原因となる。
- ・今回の選定に関しては、そこを考慮して、出力の6割程度で余裕をもって運転できるように、一台の発電機が故障しても大丈夫なよう、他の発電機から電気を送りバックアップできるような形を考えている。

発言者：北見則弘 氏（養豚経営者）

- ・畜種によって災害時の対応は異なる。また今日の参加者は立派な人が多い。現実には小規模な経営者が多いので、皆さんのいうことをできる人は少ない。
- ・自然災害に関しては、農場によって違うと思うが、どこを大事にして、どこを諦めるか考えることが必要である。
- ・発電機は14kVAを入れたが、電気工事士が来れないので、ある程度電気の知識を持っていたので自分で取り付けた。しかし400kVAは自分では無理であるが、小さい発電機を複数配置するだけで、家畜だけは助かる。
- ・シミュレーション通りにいかないのはそのとおり。何もリアルなことを考えていないので何の役にも立たない。
- ・保険の問題についてですが、経営規模は様々で、中小規模のお金のない人は保険に入れない。中小規模の皆さんの災害対策を考えるべきだと思う。中小規模の皆さんがいてこそ、地域の畜産の活性化につながる。個々の経営では、なにを守り、なにを諦めるか考えておくべきだろう。

発言者：高橋憲二 氏（酪農経営者）

- ・北見さんと同じ意見である。大規模経営者はリスクが大きいので、備えをしている。家族規模の小さな経営の意識を引き上げ、対策を考えるよう促してもらいたい。
- ・保険は大事で、農協では無敵プラスというようなプランも出している。今回の15号台風を機に変えたところだ。
- ・6~7年前に大雪があって、堆肥舎が壊れた時も、見積もりを取るとすぐに補償金をだしてくれた。今回の15号台風でも対応が早かった。お金がないと入れないといっておりましたが、保険も掛け捨てであれば安い。

- ・今の補助事業は保険への加入が条件となっていると思う。中小規模の人たちの意識をどれだけあげるかが重要だと思う。

発言者：丸山武則 氏（千葉県）

- ・災害の情報や畜舎の改修・修繕について、農業事務所・市町村・農協などから情報を得ていただきたい。
- ・長嶋さんより、県は情報収集して発信するのが遅いとの指摘があったが、関係団体へ迅速に情報提供する仕組みを検討している。
- ・今近づいている台風 10 号についても、県の HP で畜産農家あてに情報発信し、事前対策などについてアップしている。
- ・国から示された指針があり、その中に、事前確認、地域情報、畜産の避難先、緊急連絡先などの確認事項が書かれており、具体的に 1 週間分の飼料・燃料の備蓄なども掲載している。農業事務所・団体に出していくので、関係者にもお伝え願いたい。

発言者：北見則弘 氏（養豚経営者）

- ・自然災害は、台風だけでなく、地震なども含む。全部含めて考えてもらいたい。今、現実に世界の食料がどうなっているか考えると、戦争状態に近い。日本を守るためには、小さい集落単位で動かないと現実に対応できない。小さい単位で動ける体制、協力体制、これができないとダメと思う。

発言者：長嶋 透 氏（酪農経営者）

- ・情報収集、発信はネットありきで考えられている。高齢の家族経営では一番情報がもらえない。役場へ行けば、現状がどうなのか分かるようにしてほしい。
- ・昨年、光回線が切れて情報難民になったとき、成田空港のセブンイレブンでやっとネットにつながり千葉県内の状況がやっとわかった。普段あると思ったら大間違いで、そういうことをどうやってやればいいのかというのを、生産者と話し合ってもらいたいと思う。話し合う機会を作ってもらいたい。
- ・千葉県の酪農は酪農協という特殊な農協があり、情報が取れているが、鶏、豚、肉用牛の人たちは普段から付き合いがないので、情報は取れていないかもしれない。生産者とは情報収集・発信について相談してもらいたい。例えば口蹄疫が発生したと想定すると、情報が断絶していると止めることができない。畜種を超えた付き合いが必要である。

発言者：丸山武則 氏（千葉県）

- ・ネットありきで情報を伝えているので、ネットが断絶すると何もできない。地元の市町村・県農業事務所との連絡の取り方について考えてもらいたい。
- ・個々人より、組合、伝統的な結、地域の助け合いが重要である。

- ・豚、鶏では、市町村で緊急連絡網を作る動きがある。市町村を手伝いながら、地域の連絡体制を作ればよい。鶏、豚については病気のこともあるので、持ち帰って相談しながら進めたい。

発言者：(会場から)

- ・林さんは台風 15 号のとき、大変な苦労をされたが、あのときの数日間、何時間眠ることができたのか。

発言者：林 共和 氏 (養鶏経営者)

- ・1日当たり1～2時間眠ったと思う。常に見回り、発電機の状況などを点検していた。従業員は2日目、3日目は、夜10時、11時まで集卵や、鶏を抜き出しして頑張ってくれた。
- ・停電中は、従業員も家に帰って何もできず、エアコンも効かないので、農場に泊まることになった。農場ではシャワーがあるし、エアコンも動いていたので、事務所に泊まってもらった。非常食の貯えもあったので、何とか働く人のバックアップができた。

発言者：(会場から)

- ・災害時のヒトへの対応は、重要と思う。気が張っているが、疲れはたまる。高橋さんは普段から東電と併用して発電機を使用していたとのことだが、コスト的には高くついたのではないか。

発言者：高橋憲二 氏 (酪農経営者)

- ・発電機の重要性は、東日本大震災のときに気付いた。飼料のミキサーを導入するときに、合わせて発電機を導入した。コスト的には東電だけのほうが安い。ミキサー用の発電で、軽油代が6万円かかるが、東電は半額以下だろう。停電時5日間動かし続けたが、150リットル満タンで、1日で軽油は空になるので、1日200リットル必要だった。農協のローリーで満タンにしてもらい、このほか1,000リットルの予備タンクを満たしていた。このローリーでの軽油供給は本当に助かった。

発言者：全日畜専門員(調査員)

- ・発電機を融通して隣家を助けられた。これを教訓として、仲間と災害時にはこうしようなど、マニュアルのようなものを作られたか？

発言者：高橋憲二 氏 (酪農経営者)

- ・牧場にマニュアルはないが、乳業工場には停電時の申し合わせを決めたものはある。個々の農家との取り決めはない。

発言者：全日畜専門員(調査員)

- ・畜産農家の場合は点在化しているので難しいと思うが、県にはマニュアル作りの指導はないのか。

発言者：丸山武則 氏 （千葉県）

- ・事前に連絡を取り合うことを勧めているが、マニュアルを作るまでには至っていない。地域によって異なるので、有事の時に使えないという場合がある。話し合う場を設けるのが重要。

発言者：北見則弘 氏 （養豚経営者）

- ・何か文書にしようとする、農家は構えてやらない。誰がどこの農場にいるか分かっている状態を作るのが重要である。
- ・事が起きたときのマニュアルというのは、その場で考えるしかない。その場その場で対応が全然違う。だから、その場で考えられるマニュアルをトップである方々が考えて、みんなに指導してやるとか、そういう会の中のトップが指導するとか、そういう発想で会合を開いて、頭の中に植え付ければいい。そういう紙に書いておくのはだめ。絶対だめ。みんな見ないですから。覚えなし。

発言者：丸山武則 氏 （千葉県）

- ・顔を合わせて信頼づくりということではないか。

発言者：岡田 望 氏 （推進委員）

- ・マニュアルについて、北見さんと同意見。きっちりとマニュアルを作ってもしようがない。シミュレーション、訓練は、基本事項だけでよい。細かく決めても無駄である。文書にすると解釈が入り、費用がかかり、経営の違いが反映されない。ある程度の被害は享受して、その後を考えたほうがよい。

発言者：全日畜専門員（調査員）

- ・竹中さん、飼料メーカーとして非常時に、こういう場合はこうする、人員配置はこうするなど決めたものはあるのか。

発言者：竹中一展 氏 （中部飼料株式会社）

- ・とくに決めていない。そのときどきで対応している。いろいろなパターンがある。応援のため人を多く出そうとしても迷惑になることがある。要望に応じて、ケースバイケースで対応する。

発言者：全日畜専門員（調査員）

- ・下山さん、災害などで豚が死んだとき、一つの農場で対応できないが、他の農場から助けをもらうような申し合わせはあるのか。

発言者：下山正大 （推進委員、養豚経営者）

- ・申し合わせはなく、ケースバイケースである。火事になったとき、たくさん人が来てくれた。高橋さんの言うように、日ごろの付き合い、人間関係が重要と思う。
- ・発電機の給油も毎日朝一で、うちと付き合っているところが来てくれて、常時給油してくれました。付き合いというのは、日頃の近所の人間関係じゃないですかね。

発言者：北見則弘 氏（養豚経営者）

- ・台風でも被害の程度が違う。災害の時にどうするか、個々の経営者が考え方をまとめておけばよい。人によって対応は違う。連絡網は絶対必要である。

発言者：林 共和 氏（養鶏経営者）

- ・被災して目の前のことで一杯だったとき、助けられたのは県の養鶏部会のグループラインだった。
- ・自分だけでなく、他の被害者の情報や、被害を聞きつけて、炎天下、わざわざ熱死したトリを出してくれたりした。ライバルでも声を掛け合って、何人か応援に出すなど、みんなで立ち向かおうとしているので勇気づけられた。
- ・台風通過後 10 日経った頃、地元の市長が被災見舞いにきて、スーツ姿で鶏舎に来たが、その姿を見て、今頃視察に来たことについて、会社の会長が怒って追い返したこともあったようだ。
- ・飼料メーカーからも連絡が入り、人を出すと言ってくれた。ありがたかったが、人が多すぎると効率が落ちるので、断らざるを得なかった。
- ・農業協会の養鶏部会や全鶏会議、日鶏連など、皆さん情報がなかった。自分たちから全鶏会議、日鶏連などへ情報を預けて、そこから伝えてもらうことはできないか。
- ・10 月初めに農水省へ行ったとき、「1 か月たって、あれだけニュースでもなんでも報道されたりしているのに、農水省の方が、しかも前線に立つ方が、現地へ行けていないので現場が分からなかった、写真を見せてもらってよく分かった」と担当者から言われたのはショックだった。マスコミで報道されても、情報は伝わっていなかった。

発言者：(会場から)

- ・今日のワークショップで、飼料メーカーさんの力が大きいことに感心した。総合農協は畜産農家が少ないため多くの情報が収集できないが、酪農協の組織はまとめ役で活発なのでそこそこの情報はあつる。また、市町村は情報が来るまで待っているという待ちの姿勢であると思う。
- ・メーカーさんは営業ではあつても、きちんと農家に連絡して、状況を確認している。農家のカバー率はどの程度か。もし情報を得たのなら、県・市町村と共有できないか。

発言者：竹中一展 氏（中部飼料株式会社）

- ・災害が起こったときのエリアで情報収集するとき、特約店からの情報と直接農家から聞き取る方法の2つある。基本はエリアの生産者、特約店へ連絡し、情報を取りまとめ、上司に報告し、関係者で

情報共有するという流れである。

発言者：全日畜専門員（調査員）

- ・今回の支援した農家の件数をみると、飼料メーカーからの支援が非常によくやっていただいたと思うが、会場の関係者からコメントをいただきたい。

発言者：（会場から、飼料メーカー）

- ・災害が発生した場合、北海道であったりとか九州であったりとか、結構いろいろなところであったが、災害時には短時間で営業本部に情報を集め、何が必要なのか、どういうことが想定されるのかということ、トップダウンで必要な指示を行っている。

発言者：（会場から、飼料メーカー）

- ・東日本大震災の時、東京にいた。会社として災害対策を行うときには対策本部を立ち上げ、情報収集する。東日本大震災のときは、鹿島、釜石が大変な状況で、北海道、九州から日本海側に海上輸送し、日本海側から被災地へ陸送した。生き物を扱うので、エサを切らせてはいけない、生産者に安心をしていただく最低限のことはやっていこうということであった。工業会を通じて生産者にエサをとどけ、エサを切らさないようにできた。

発言者：（会場から、飼料メーカー）

- ・災害対応のマニュアルはないが、災害地区の範囲内で、担当者が生産者に電話し、被災状況を確認し、応援が必要であれば出向くようにしている。

第二部の終わりに、一般社団法人 全日本配合飼料価格畜産安定基金の常務理事 引地和明 氏 より集会全体についてご感想を述べていただきました。

発言者：引地和明 氏 （一般社団法人 全日本配合飼料価格畜産安定基金 常務理事）

- ・本日の日経新聞を読んでいたところ、総裁選の記事の中で、自助、共助、公助という話があった。災害対応もこの並びではないかと思う。国、県に頼る前に、まず自分が頑張り、落ち着いたところで公助を求める。その辺はきちっと見据えて、今回の仕事をしていかないといけないなと思いました。
- ・畜産の関係は作物と異なり生き物を扱うので、水、電気、エサの確保が重要で、今の畜産は電気なしにはありえない。
- ・災害時は時間との戦いで、マニュアルなどと言ってられない。自分の経験とセンスで対応するしかない、というのが現実である。
- ・「備え」というキーワードがあったが、「備え」という心構えを頭の中で整理しておく必要がある。
- ・心構えだけではだめなので、発電機も含めて物の備えも大事なんです、日頃から畜舎あるいは施設

で災害が起きたときにどうするのかというのは、自己点検も必要。

- ・マニュアルは整理のための材料の一つでしかない。できれば私どもの今回の仕事は、なるべく分かりやすいような、むしろヒントになるような、あるいは、分からないことについては聞く場所が分かるような、何かそういうほうが現実的なのではないかなと私も感じました。
- ・メガファームと家族経営は異なるし、どこにお金をかけ、どこをあきらめるか、日ごろから点検するのが重要だろう。この JRA 事業では、ワークショップやアンケートを通じて、経営者にとってヒントとなるような材料として、マニュアルを仕上げられればよいと思う。

発言者：全日畜専門員（調査員）

- ・ありがとうございました。以上で閉会とします。

以上

[千葉会場のスナップ写真から]

- ・集会名 : 全日畜ワークショップ (自然災害に強い畜産経営を目指して)
- ・開催日 : 令和2年9月4日(金) 13:00~16:00
- ・会場 : ホテル「ポートプラザ ちば」 (2階「パール」)

主催者を代表して開会挨拶の全日畜理事
長嶋 透 氏。私も大きな被害を被ったひとり、
テレビの報道と現場は大違い、現場に
いない人では分からないことが沢山起きて
いたと、1年前を振り返って挨拶。

[全日畜理事：長嶋 氏]



約3時間にわたる集会の司会進行役は、全
日畜専門員の 内田 と 神谷 が担当。



コロナ禍の下での開催。事務局から感染防
止対策についての協力をお願い(健康確
認、消毒の徹底、マスクの着用、会場の換
気、適度に休憩を入れた会議進行、等)。
会場は、社会的距離を十分に確保した設
営。



昨年の 15 号台風では畜舎等の施設破損や長期停電で家畜飼養に大きな被害があった。この経験を踏まえて千葉県 HP では畜産農家あての迅速な情報発信の充実を図っていると説明。

[千葉県：丸井 氏]



東日本大震災の教訓で導入した発電機（150kVA）が活躍したが、これまで経験したことのない強さの台風で、屋根が飛んだり、死ぬ牛が出たり、生乳を廃棄したり、牧場の被害は甚大でいまだ復興中と具体的な事例を報告。

[生産者ゲスト：高橋 氏]



長すぎた停電の被害は計り知れない。母豚が大量に死んだ。経営の継続に、豚舎は直せばよいが、家畜を確保するのは大変。災害に強い畜産とは、災害に備えることで、経営者の感覚が問われると報告。

[生産者ゲスト：北見 氏]



日記のように書き留め撮影した写真を持参し、2週間続いた停電の様子を報告。高い湿気で3鶏舎で32,000羽が死んだ、台風の湿気と夏の温度帯の鶏舎はサウナと同じ。死鶏の搬出と鶏ふん処理には心を痛めた。

[生産者ゲスト：林 氏]



大きな発電機はユニックでは荷下ろしできない、太いケーブルの敷設は電気工士が必要等、災害対策のシミュレーションの必要性を説明。クーラーステーションが止まり、生乳は廃棄やエコフィードとして処分したと報告。

[東金酪農協：長嶋 氏]



被災直後に、被災した畜産生産者への配合飼料会社の支援状況をアンケート調査した結果を報告。会員の72%が被災し、飼料会社はすぐに対応を行い、その内容は、死亡した家畜の処理、発電機の供給、水没した稲わらへの対応等で、改めて頼もしい存在と報告。

[千葉県全日畜：瓦井 氏]



最大瞬間風速 57.5m/s の 15 号台風への飼料会社からの支援の報告。飼料の供給体制は何とか維持できた。生産農場への労働力支援では、死亡家畜の回収、生産物の回収、畜舎の修繕作業等が主な支援作業と報告。

[飼料会社：竹中 氏]



発電機が無くてたくさんの豚を死なせた経営者がいた。電気がないと経営はどうしようもないと痛感。また、建物、家畜、被災後の再開までを含む保険への加入が重要と報告。

[推進委員：下山 氏]



昨年の台風 15 号の被害を引きずっている人は多い。道路、水、電気などへの基本的な備えが必要。ネットワーク作りも大切。シミュレーションだけでなく訓練をしないと役に立たない。想定外のことは必ず起こると報告。

[推進委員：岡田 氏]



ゲストの報告を聞いていて、飼料メーカーのみなさん（たぶん営業マンでしょうが）の力の大きいことに興味した。メーカーさんは営業のツールできちんと生産者の状況を把握・確認している、と感想を述べた。

[会場から：松木 氏]



（飼料メーカー）自社には災害対応マニュアルは無いが、災害地域の範囲内は担当者が被災状況を収集している。確認して応援が必要であれば、すぐに出向くようにしていると報告。

[会場から：西條 氏]



災害対応も自助、共助、公助が必要。畜産業は、作物と異なり動物を扱うので、水、電気、工サの確保は重要。災害時は時間との闘い、経験とセンスが問われる。事前に心構えを頭に整理しておくことが大事と感想を述べた。

[全日基：引地 氏]





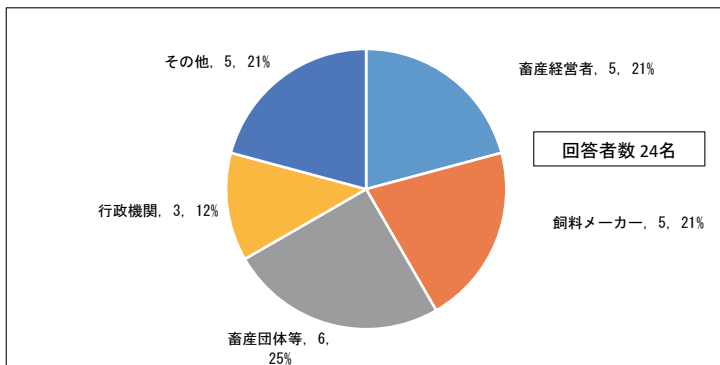
集会は、コロナ禍の下での開催のため、十分に密にならない定員を設けて、事前の参加者登録を手続きして開催。参加者数30名。



辛い体験にふれながら畜産経営の継続について真剣に議論した1日でした。

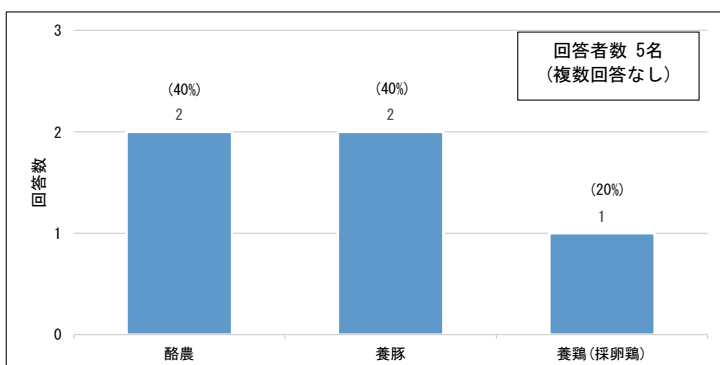
令和2年度自然災害第1回ワークショップ 千葉会場 アンケート結果 (回答者総数 24 名)

問1 回答者の属性



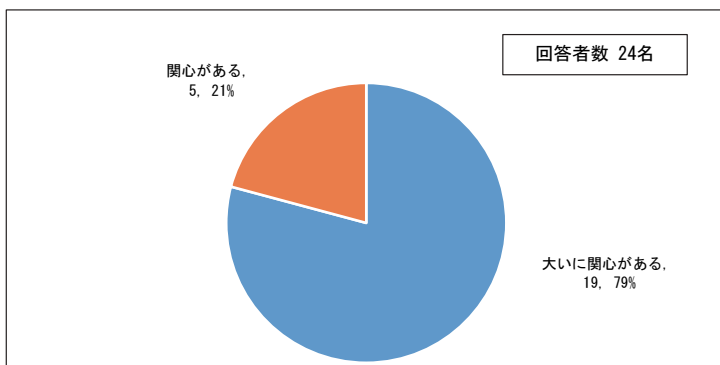
回答者の属性は、「畜産団体等」が25%、「畜産経営者」及び「飼料メーカー」が21%、「行政機関」が12%であった。「その他」の21%の内訳は、「金融機関」、「報道機関」及び「基金協会」であった。

問2 畜産経営の「畜種」



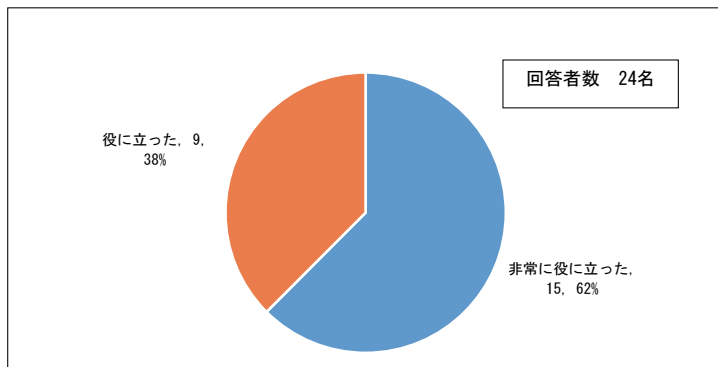
前問で、「畜産経営者」と回答した者の「畜種」については、「酪農」及び「養豚」が40%、「養鶏(採卵鶏)」が20%であった。畜種複合の経営体はなかった。

問3 「自然災害に強い畜産経営を目指して」への関心度合い



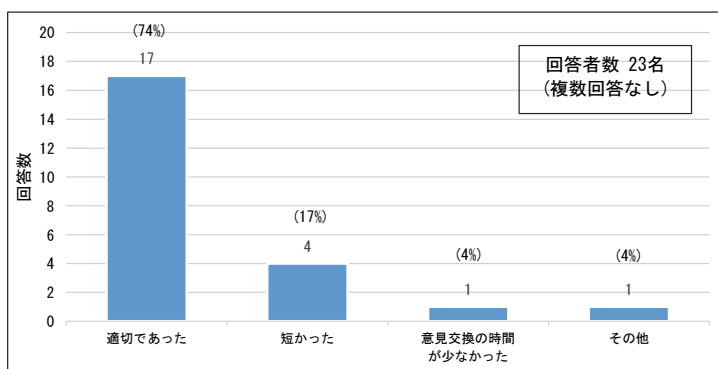
ワークショップのテーマである「自然災害に強い畜産経営を目指して」への関心度合いは、「大いに関心がある」が79%、「関心がある」が21%で回答者全員の関心が高かった。

問4 本日のワークショップは役に立ったか



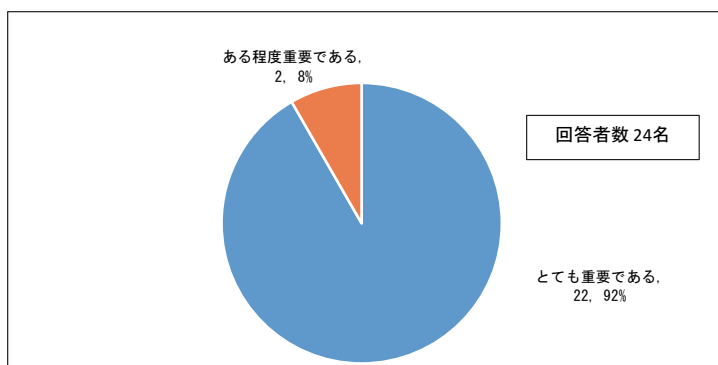
ワークショップが役に立ったかについては、「非常に役に立った」が62%、「役に立った」が38%と回答者全員が肯定的な回答をしている。

問5 時間配分について



時間配分については、「適切であった」が74%であった。そのほか、「短かった」が17%。「意見交換の時間が少なかった」が4%あった。「その他」4%に「畜産経営者の発表時間にもっと時間を割いた方がいい」という意見があった。

問6 「自然災害に強い畜産経営の実現調査事業」は重要と考えるか



「自然災害に強い畜産経営の実現調査事業」は重要と考えるかという問に対しては、「とても重要である」が92%、「ある程度重要である」が8%と、回答者全員が肯定的な回答をしている。

問7 (自由意見)

- ・ 去年の台風被害はひどいものだった。そして対策の不備やもろさを露呈したと思う。今後はいっそう個々の農家レベルで対策が重要になると思う。
- ・ 自然災害等大きな災害発生時の情報収集・集約がその後の対応、対策に重要なことだと感じた。また、情報を広く行政、民間問わず共有できる仕組みの構築に向けて小さな単位(隣近所、畜種単位)、市町村単位から考えていく必要があるのではないかと。情報は正確な内容が大切で、非常事態時にもすれば流言飛語に流されることがあつてはならないと思うので、情報収集の項目を統一することも必要ではないか。
- ・ 地震、台風、伝染病、噴火、各テーマを取り上げて欲しい。
- ・ 自然災害の中身は台風、地震だけではない。その他色々なことが考えられる。全てを考慮すべきだと思う。
- ・ 水と電気の重要性について改めて考えさせられた。ここ近年気候変動が当たり前となっている。安定経営を継続するために必要な事は、常に準備をしておく事だと痛感させられた。
- ・ 生産者の規模の違いによる備えられる範囲の違い、また、それに対応した飼料メーカーとしての対応を考えないといけないと感じた。
- ・ 畜産生産者の生の声、現場の声、経験に基づいた声を聞いた。行政と現場との考え方の乖離が大きい。飼料メーカーの営業の役割の重要性を痛感した。
- ・ 災害時の備えとして、近隣や周辺の住人との連携が必要である事を認識。災害時に金融面からどのような支援ができるか検討していきたい。
- ・ 公庫をセーフティーネット資金で、自然災害後の資金支援をしているが、頻発する災害やコロナ等で借入が限界になっている経営も増えてきたような気がする。これからは、備えが重要なのだと思う。
- ・ マニュアルのあり方などの議論はとても参考になった。
- ・ マニュアルやシミュレーションに対して否定的な意見が多かったが難しいものではなく、最低限必要なものを決めておく必要はあると思う。気が動転している時には大切である。
- ・ 結果を楽しみにしている。
- ・ このワークショップは参加者が自由に発言できて大変良かった。何を言いたいのか分かった。
- ・ 生産者の方、あるいはその他の関係者の方のような意見が聞け、大いに役だったと思う。
- ・ 現場でしかわからない、体験しないとわからない話が聞けて、大変参考になった。
- ・ 畜産経営者から貴重な意見をいただき大変参考になった。他地域でもこのようなワークショップを開催すると良いと思う。

台風被害の畜産農家 ワークショップ

発電機あるが使えず・SNSで友人が救援

備え・共助 大切さ痛感

記事

写真提供：佐藤 誠

取材：佐藤 誠、写真提供：佐藤 誠

佐藤 誠の取材記事 台風被害の畜産農家 ワークショップ 備え・共助 大切さ痛感



推播した。

し稼ン何は論がを いでけ 加設行い強Aく

記事

〔千葉〕 ◎ 千葉の台風被災酪農家が電源の重要性を強調
「千葉」 畜産司斗メーケリーと刊月卜る各豊百産豊家で

こナが徹安①こ家来 ナがヨこ物を 況 しれし 参睡を伏にはづ

(7)



し 酪農乳業全体の連携を訴えた

が足 両か車へ生娘 政生の台 主ナニ一が 吉豊千合

記事

〔千葉〕 ◎ 災害発生に備え電源確保と連絡体制が不可欠
「千葉」 畜産司斗メーケリーの刊月洛豊家なびで且載する

調り 也先定生先日同 備況不 必 ま八又 火先門室 果の因の云 る節

(6)

(3)

2020年(令和2年)9月25日(金曜日)

第2103号

第2103号

第2103号

発行所 株式会社 鶏鳴新聞社

〒104-0033 東京都中央区新田2-6-16

電話 03-3297-5556(代)

FAX 03-3297-5558

http://www.keimeine.jp

E-mail: info@keimeine.jp

発行日 毎月5日 15日 25日

購読料(送料、税込み) 1か年 13,200円

1か月 1,100円 1部 440円 振替口座(東京) 00150-2-71528番

全日畜がワクシヨップ

(一) 全日畜は、ワクシヨップの導入により、生産者の負担を軽減し、消費者の健康を確保する。

畜産生産者の負担に
と延べ7日間、15人が
死家畜の回収、生産物
また、畜舎の消毒作業

毎 日



日本中央競馬会
特別振興資金助成事業

自然災害に備えき!!



災害パトロール隊



全 日 畜

一般社団法人 全日本畜産経営者協会

〒106-0041

東京都港区麻布台2-2-1 (麻布台ビル)

TEL 03-3583-8034 FAX 03-6277-8940

事業のクリアファイルを作成しました。

[メ モ]

A series of horizontal dashed lines for writing.



「全日畜」は畜種横断の畜産経営者の団体です

